

あの歴史に立ち会う

—「方正地区日本人公墓」 建立前後の回想—

北京 趙 喜晨

■ 前例のない歴史的な仕事

1961年、26歳の時、私は黒竜江省人民政府外事弁公室に異動を命じられ、1985年、仕事の必要から他の部門に異動するまで、ずっとそこで仕事をした。この25年間、私はほとんど居留民関係の仕事に従事した。

当時、黒竜江省「外事弁公室」は、本来の仕事のほかに、ふたつの「名義」を持っていた。すなわち黒竜江省人民政府「外事処」と、ハルピン市人民政府「外事処」であり、これは省と市の渉外事務の処理機構である。黒竜江省は外国居留民が最も多い省の一つである。省の「外事弁公室」はハルピン市以外の各地区、市、県の居留民業務について、すべての方針と原則の指導を行い、具体的業務は地方政府が自主的に処理する、というものだ。

当時、方正県は松花江地区に属していて、慣例によって方正県の渉外事務は、地区および県が自主的に処理することになっていた。しかし、方正県に日本人公墓を建立する一件は、中央政府が指導し、国の外交部が認可したものであり、コトは国内だけではなく国際的な影響に関わることであり、意味するところは極めて大きい。上層部はこの点を重視し、検討した結果、例外的にスタッフを派遣し、具体的な仕事を直接、処理するようにしたのである。幸いにも私はこの任務を任せられ、この忘れるわけにはいかない歴史に自ら関わる機会を持ったのである。

このようにハルピン市以外の居留民の仕事を直接、処理することになったのは、私の数十年の仕事の経歴の中で、この時だけである。それから数十年、この公墓が中日両国人民の相互理解、友好を深め、両国人民の歴史を見つめ、未来に向かって積極的な作用を及ぼした。このことは、当時の中央の指導の高邁なリーダーシップを証明するに足るものである。

■ 石材選びと安置場所

墓碑の建設は、世事に疎く、仕事の経験の足りない私について言えば、疑いようもなく重い仕事だった。まず最初に、外国人の墓地とはどういうものかを調べた。当時ハルピンにあった外国人の墓碑は、どれもみんな豪華で洗練されたものだった。ほとんどのものは輸入された石材でできていた。これから日本人の墓碑を建てようとしたら、どのようなものにしたらいいか…私はあれこれ考えた。当時、中国の政治、経済の状態からいけば、そして当時の中日関係の状況からいけば、セメントで固めたコンクリート製にしてもおかしくはなかった。それまで方正の現地で建っていた日本人公墓の前身は、ただ土を盛ったところへ木の墓碑を1本立てただけのものだった。私たちは討論し、これは長く言い伝えら

れる大仕事であるから、真剣に対処しなければならない。歴史の考察にも耐えうる永久的な墓碑を建てる必要がある。そこで意見が一致したのは、長い時間にも耐えうる石材で作らなければならない、ということだった。

方正県政府は私たちとこのことについて相談したとき、公有地の中から、墓地建設の土地を無料で提供してくれることに同意した。方正県政府にはまた、それまでの土饅頭のお墓があった土地がくぼ地で、いつも水害の心配があり、今回は少し高い土地を選んで、水害のたびに建てなおさなければならないという悩みを解消したい、という考えがあった。それからまもなく、方正側から私に電話があり、周囲の地形を詳しく調査した結果、高台で日当たりがよく、周りが松林で墓碑を建てるには格好の場所がある、今後どれほど大きな水害があっても大丈夫なところだ、一度来て見てもらいたい、と言ってきた。私は上役に相談した上で彼らの選択に同意する旨、返事した。こうして方正県幹部の意見に従って建設場所が決まった。省と県の墓碑の建設場所は、このようにして決まった。これが現在の「方正地区日本人公墓」の所在地である。

■ 墓碑の形

日本人のためにお墓を建てるには日本人の風俗習慣に合っていないといけない。しかし私は日本人のお墓がどのようなものか見たことがない。もしもいい加減なお墓を建てたら現代の人たちだけではなく後世の識者の物笑いにならないか？ 私は自転車に乗って外国人墓地を見て回った。「ギリシャ正教墓地」と「ユダヤ人墓地」はいずれもヨーロッパ人の十字架のついた墓碑である。日本人の墓地も墓碑も見つからなかった。その後、私は黒龍江省図書館へ行って、解放前のグラフ誌を調べた。そこで縦長の日本人の墓碑と、高く先がとがった関東軍の「忠霊塔」の写真を見つけた。私は方正の墓碑の形は、日本人の習俗に合っているし、これなら中国人に関東軍の「忠霊塔」を連想させず、中国人の感情を傷つけないだろう、と思った。そこで私の頭の中では、次第に墓碑の形の輪郭が出来上がっていった。それは四面で直立し、下が大きく上が小さい、頭部の四面が錐形の墓碑である。私が紙に描いたのを見て、上役も同僚も完全に同意してくれた。これが現在「方正中日友好園林」に建っている「方正地区日本人公墓」の青写真だった。

■ 碑文の揮毫

ここに埋葬されているのは日本の開拓団の農民であり、彼らもまた日本の軍国主義の中国侵略の犠牲者である。この墓碑の建立は日本の民衆の死者を尊重するものであり、生き残った開拓民に対する慰労であり、同時にまた後世の人々に対する警告である。

なぜ碑文に「方正県」と書かず「方正地区」と書いたか？ なぜそのまま「松花江地区」と書かなかったのか？

当時、中国の行政区画の規定によって、上から下へ「省→地区（市）→県→郷（鎮）→村」という編制の決まりがあった。当時、黒龍江省には「松花江地区」という行政区域があった（今はもう解消されている）。「地区」の下に10あまりの県が属し、「方正県」は「松花江地区」に属する一つの県であった。もし墓碑に「松花江地区」と書けば墓碑の該当す

る地域を拡大し、適切ではない。また、ただ「方正県」と書いたのでは狭すぎる。亡くなった開拓民はもともと方正県に住んでいた開拓民だけではないからである。その点「地区」という中国語はもともと「比較的範囲が広い場所」という意味である。そこで「県」をやめ、「地区」としたほうが適切だ、ということで「方正地区」となったものであり、行政区画としての「地区」の意味合いはない。

墓碑の文字を議論していた時、「日本の中国侵略で死亡した日本人公墓」という案も出た。これについて私は適切ではないと思った。これでは開拓民も関東軍も含む感じで錯覚を与えてしまい、本来の意味を変えることになるからである。私は「1945年没」と明記すべきだと考えた。すでにご存知のように1945年は日本が戦争に負け、投降した年だからである。史料にはこう記載されている。

＜ソ連赤軍は8月9日、電撃的に東北に進撃、日本の関東軍は対応できず、あわただしく応戦したものの1週間足らずで簡単に壊滅した。8月14日、日本はポツダム宣言受諾を宣言。8月15日、天皇は降伏の証書を放送した。関東軍はたちまち全線で瓦解した。関東軍司令官山田乙三は関東軍に作戦を停止し、ソ連軍に投降するよう命令した＞

8月下旬から関東軍はみんなソ連赤軍の俘虜となり、続々とシベリヤ大森林の伐採に送られた。松花江沿岸ではほとんど激しい戦闘はなかった。そして日本の開拓民は松花江沿岸の樺川、鶴崗、湯原、依蘭などから方正へ逃亡した時、もう8月末から9月上、中旬になっていた。ここではもう、急速に寒い晩秋から初冬の季節になっていた。そこで飢えと寒さと病気で死んだのは、哀れな日本開拓団の人達だけで、関東軍の兵は含まれていない。幸い生き延びた開拓民は、青壮年はみんな兵隊にとられ、誰もいなくなっていたと云っている。

■ 石材を選ぶ

私は何度もハルピンの極楽寺近くにある「ハルピン市石碑彫刻工場」へ出かけ、石材を選んだ。しかしどれもみんな中国人のために作る碑の石材ばかりで、選ぶのが難しい。形や寸法が合わないのではなく、材質が意に満たないのである。私は何度も彫刻工場と役所の間を往復しながら決定しかねていた。その後、私は突然、「文化公園」で外国人墓地をはかの場所に移していることを思い出した。そうだ、あそこへ行ってぴったりの石材を選び、再加工して利用したらいいではないか？ 私はもう倒されて乱雑に置かれた一群の墓石の中から、一つ大きな花崗岩の石碑を見つけた。うまいことに私が考えていた形と大きさにぴったりである。碑の隅にロシア語で「イタリー製」と彫ってある。何の傷もひびもない。そこでこの石碑に決め、石碑彫刻工場へ運ばせて加工することにしたのだった。

■ 碑文の書と彫刻

どんな書体で碑文を書いたらいいだろうか？ あれこれ考えたが、どうにも行き詰まった時、突然、気がついたのが私たちの職場に架けられている扁額の、非常に美しく整った書のことだった。この先生にお願いして書いていただいたらいいのではないかと？ そう思ってこの先生を探した。その結果、省の赤十字会に協力していただき、ついに「黒竜江省

文史館」におられた秦先生という老先生を捜し当てた。秦先生はお金は要らないと言う。先生の望みに従って、私たちは酒をお礼に差し上げることにした。当時、ハルピンの市場には、もう何年も白酒（バイチュウ、アルコール度の強い蒸留酒）を見かけなくなっていた。この酒好きな人にとって、これはどれほど身にこたえることだったか…。私たちはハルピン市商業局に頼んで特別に白酒を都合してもらい、秦先生に差し上げた。秦先生の表情が生き生きとし、気が乗って、雄大で力強く、端正で盛んな碑文が、紙の上で躍動した。これはまさに後世に残る傑作と言うべき書となった。私たちはこれを「彫刻工場」へ届け、ミスがないよう、くれぐれも気を入れて彫るように頼んだ。それから約半月後、精緻に彫り上げた墓碑が出来上がった。

■ 墓碑の輸送

彫刻工場がこの仕事を引き受ける時、工場の人達は、どうして日本人のためにこの碑を建てるのか、全く理解ができないと私に説明を求めた。根気よく説明して彼らも理解してくれ、品質を保証すること、期日までに彫り終えることを約束してくれた。日本を恨みに思う人達がこの石碑を見て破壊しようとすることを恐れた私たちは彫刻工場側に頼んで、石碑をカマスで何重にも包み、運び出すまで専門の監視人をつけて、しっかり倉庫に鍵をかけるよう頼んだ。当時、ハルピンと方正間は交通が不便で、墓碑が彫り終わった後もなかなか運ぶことができなかった。調査の結果、唯一、水路で運ぶのが安全で早いことがわかったので、水路で、と決めた。しかしこの時はちょうど渇水期で、トン数の大きな船は航行できない。私たちは毎日、降雨を祈って、早く豊水期が来るのを待った。毎週、黒竜江省航運局へ何回も電話して、水位と運行予定を問い合わせた。そして8月、ついに航行してよいという通知を受けた。「東方紅」という松花江では最も大きい貨客船の底部に墓碑は据えられ、10余時間かかってようやく伊漢通の波止場に着いた。雨が降れば船の航行には都合がいい。しかし波止場から墓碑の設置場所までは10キロあまりの陸路を車で運ばなければならない。この時、道路はひどくぬかるみ、車の運行はきわめて大変だった。方正県政府は多くの困難を克服して墓碑を目的地まで運んだ。方正県政府は赤レンガとコンクリートで墓碑のベースを作っておいてくれ、石碑は上の背面で高さ3メートルあり、大変、尊厳な感じでなおかつ慎み深いムードを持っている。

■ 墓碑の保護

ご存知のように、1966年に始まった文化大革命は中国全土を災害に巻き込み、多くの文化遺産が破壊され、多くの歴史上有名な人達のお墓が壊された。当然、「紅衛兵」は、かつての敵国日本人の公墓を放っておくはずがない。彼らはあくまで墓碑を壊そうとした。緊急事態にのぞみ、方正県政府は直ちに省政府にどう対処したらいいか、指示を仰いだ。電話を私が受けた。すぐ上司に指示を仰ぐと、省政府の名で次の命令を出した。

「この公墓は中央政府が許可して建設したものだ。埋葬されているのは日本の庶民であり、日本の軍人ではない。誰であれ、どの団体であれ、それを壊してはならない」

それと同時に公安部門に公墓を保護する措置を講ずるよう要請した。同時に私を方正に

派遣し、現地での状況を見させ、重ねてお金を出し、お墓のまわりに柵をめぐらせて保護を厳重にした。紅衛兵はこの状況を見てあきらめ、引き下がった。こうして災難は免れた。その後、方正政府は数十年、日常の維持、管理に力を注ぎ、現在見るように、この墓碑を完全に維持管理して今日に至っている。墓碑の保護は、とりもなおさず中日両国人民の友好を守ることである。

■ 遺憾と期待

最近、大使館の友人が方正県を訪問するにあたって、私に何か用はないかと尋ねた。私は彼女に墓碑の裏側に詳しい碑文が加わっているかどうか、見てきてくれるよう頼んだ。帰ってきて彼女は何もなかった、と答えた。墓碑の背面に碑文がないのが、この数十年、残念に思ってきたことである。私はいつも碑の背面に碑文があったほうが、表の石面だけにあるより良い、といつも感じている。私たちのこの世代は、この時代をこの身で生きてきたのだ。自ら次の世代に伝えることができる。では次の世代は？ こうした文字は前人が歩いた道を、体験した歴史を、簡潔に彼らに伝え、彼らに深く考えてもらい、知恵を出してもらうことが、さらに良いことではないだろうか？ もしもだれか志ある者が現れてやってくれるなら、私と同じようにこの公墓に関心がある人達を感動させるに違いない。

小生、文才はなほだ浅薄であることを省みず、厚顔にも以下のような文字を並べてみた。それはほかでもない、優れた書き手の登場を待望すればこそである。

*

《1931年9月 日本は東北三省を占領するや植民地政策を実施 日本の農民を広大な農地に送り込む 開拓団として農耕に励むも 時の流れ速く 1945年8月 日本軍降伏 あまた開拓民 惶惶として逃げ惑う 九死に一生を得て方正に辿り着くも 飢餓 酷寒 病疫に耐え切れず 罪なき亡霊五千 1963年春 荒地開墾の残留婦人 白骨を発見して惶懼 これを集めて埋める 申請を受けてこの年5月 中国政府 仁慈の心をもって碑を建て 亡魂を悼み 故国を想いながら他郷に没した魂魄を慰む 後世の者 前の経験を忘れず後の教訓とせんことを 中日の戦 永遠にやみ 善隣友好を 永遠に忘れぬために 2010年3月 追記》

(奥村正雄訳)

(ちょう・きしん：75歳。1961年から1985年まで黒竜江省政府外事弁公室領事僑務処に勤務。方正地区日本人公墓建設時にこれを担当。石材選びから墓碑銘の書家探し、方正までの搬送を陣頭指揮。日本処科長、処長を歴任。現在、北京市在住。方正友好交流の会の「方正墓参の旅」で世話していただいているハルピン中国康輝国際旅行社の趙航社長は筆者の次男)